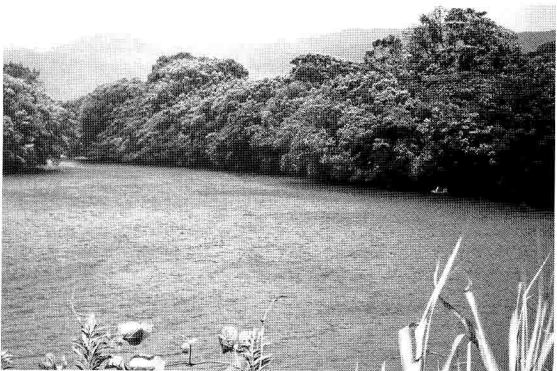


十五、大間池心中の歌^{だいまいけ}

むかし篠栗をはじめ糟屋郡いつたいで歌われた、「おいん万次郎、大間池心中の歌」という数え歌がありました。二つとせ ひろい筑前糟屋郡 大川大字大隈の 大間の池にて心中あり」で始まる長い数え歌で、その結びは、『十六とせ 六道の辻に迷わじとたがいのからだをくくりあい なむあみだぶつと池の中』となって終っています。

明治のころ、ともに若杉村に生まれた十八歳の娘おいんと、二十歳になる青年万次郎は身分がいの故に恋仲を裂かれ追い詰められて、ついに大間池に身を投げて心中を遂げます。昔の人は情に篤く、身近に起ったこの熱愛と悲恋の結末を聞くとすぐに、十六節にもおよぶ長い鎮魂の歌を作って、歌いひろめ歌いついだのです。

六道というのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上



の六界であつて、生きとし生けるものはすべて、生死を重ねつつ、この六界を経めぐるとされています。だから「六道の辻に迷わじと、たがいのからだをくくりあい」というのは、死んだあと別れ別れにこの六道に迷わないように、たとえ地獄になりともいつしよに行こうとして体をくくりあつたということであつて、「五つとせ、いまやおいんは恋の闇」という闇路の深さから、死をもつて逃れようとした二人の若者に向けた鎮魂の歌の結びとして、まことにふさわしいものがあります。

現代はもう、こんな歌を作るような人はだれもいません。かつて、民衆の中に大勢いた野に歌うあの無名の詩人たちは、いつたいどこに行つてしまったのでしょうか。

明和元年（一七六四）にきざかれた新大間池。池の切れ込みの奥に、有名な井山隧道からの水路が注いでいます。